

## 朝鮮学校における「祖国」の意味 (2)

—朝鮮学校と朝鮮民主主義人民共和国との関係から—

### Meanings of the “Home Country” at Korean Schools in Japan

山本かほり(愛知県立大学)

YAMAMOTO, Kaori(Aichi Prefectural University)

キーワード：ナショナルアイデンティティ、朝鮮学校、在日朝鮮人

本報告の目的は、昨年の本学会冬季大会での報告に続き、朝鮮学校における「祖国」とは何かについて考察することになる。問題意識も継続しており、朝鮮学校が「ウリナラ」(私たちの国)と呼び、国家としての正当性をもつのは朝鮮民主主義人民共和国(朝鮮)であるが、朝鮮学校関係者にとって、そのことがもつ意味は何か?そして、さらに、なぜ、あの朝鮮に強い愛着をもつのだろうか?そして、そのことが、朝鮮学校に関わる人々の人生にどのような意味をもっているのだろうかという点にある。

朝鮮は、現在の日本社会において、絶対的に「他者化」された国家であり、常に、「理解できない」「何をするのかわからない」脅威の国家であり、同時に「荒唐無稽な」国家として嘲笑の対象でもある。朝鮮学校は、朝鮮との歴史的な経緯の中で、朝鮮を「祖国」とし、密接な関係を持ち続けてきたがゆえに、常に日本社会の中では、排除と攻撃の対象となってきた。

このような現実がゆえに、朝鮮学校でのフィールドワークをベースにした研究成果が発表されるようになった現在においても、朝鮮学校と朝鮮との関係は(意識的か無意識的かは別として)言及されず、その関係は「脱色され」または「無にされ」、「地域に開かれた学校」としての朝鮮学校の試みに焦点があたっているように思われる。この点は、変容しつつある朝鮮学校の実態としては、非常に大切なものであるが、同時に、朝鮮学校は、厳然として、朝鮮を朝鮮半島における唯一正当な国家としてみなさい、学校教育(特に高級学校=高校レベル)の営みでは、朝鮮との密接な関係を示すものは多く見受けられる。

報告者自身の4年間にわたる朝鮮学校での参与観察においても、朝鮮学校の日常的な営みにおいても、生徒たち自身が、朝鮮に対して愛着や憧憬の気持ちを持っていることがわかる出来事に頻繁に遭遇する。

本報告においては、なぜ、朝鮮学校が、または朝鮮学校に関わる人々が、朝

鮮に対して、強い愛着や憧憬をもつのかを、インタビューや参与観察から明らかにしつつ、かれらにとって、「祖国」がもつ意味を考察していきたい。

さらには、3回にわたる朝鮮高級学校3年生の「祖国訪問」(=「修学旅行」)への同行調査から見えてきた、朝鮮学校生の中で形成されるナショナルアイデンティティの内実についても言及したい。

「北朝鮮」というだけで、思考停止し、「洗脳」「プロパガンダ」という視点のみで、朝鮮学校生たちの朝鮮での経験が想像されがちであるが、報告者自身の参与観察から、生徒たちが内的に、かつ能動的に、朝鮮学校での教育の積み上げと朝鮮での経験を統合し、自らのナショナルアイデンティティを模索するその過程を描いてみたいと考えている。

日本の社会科学の中では、朝鮮学校で「追求」される「民族」や「愛国」(ナショナリズム)は乗り越えるべきものとして考えられてきた。しかしながら、在日朝鮮人にとって、日本社会の状況および本国の朝鮮半島の現状は、いまだ民族やナショナリズムに向き合わざるを得ない状況であることをふまえつつ、朝鮮学校が直面している様々な政治的困難について考察を深めていきたい。

このことは、ひいては、日本の外国人施策、外国にルーツをもつ子どもたちの教育に関する問題を考える糸口にもなるであろう。